

国語〔問題〕

(100点・90分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見たり、裏返したりしてはいけません。
2. この問題冊子は24ページあり、解答用紙は1枚(両面)です。
試験中に問題冊子・解答用紙の印刷不鮮明、ページの落丁などに気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
3. 試験開始後、ただちに解答用紙の所定記入欄に、氏名・受験番号・誕生日をそれぞれ正しく記入し、さらに受験番号・誕生日をその下のマーク欄にマークしなさい。
4. 受験番号・誕生日が正しくマークされていない場合は、採点できないことがあります。
5. 解答は、解答用紙の解答欄に各設問で指示された方法で記入しなさい。
マーク方式は、例えば、

20

と表示のある問いに対して②と解答する場合は、次の(例)のように解答番号20の解答欄の②にマークしなさい。

(例)

解答番号	解 答 欄
20	① ● ③ ④

6. 問題冊子の余白等は、下書きなどに適宜利用してよいが、各設問で指示された解答は、必ず解答用紙の解答欄に指示された方法で記入しなさい。
7. この時間は「数学」または「国語」の選択科目となります。メディア情報学部情報システム学科を受験する場合は必ず「数学」を選択して解答しなさい。
8. 試験終了後、提出は解答用紙のみとし、問題冊子は持ち帰りなさい。

第一問

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

インドネシアのジャカルタで、私のゼミナールの卒業生であった女性が結婚したと聞いたのは、数年前のことであった。相手はインドネシア人の、年下のロックのギター奏者であった。

彼女は建築家としての生活をはじめたばかりで、ジャカルタにも建築の仕事で单身乗り込んでいったくらいだから、まさかそんなに早々と結婚するとは、彼女の同期生たちも考えがおよばなかった。

彼女が、ご主人と生まれて五か月ほどのあかちゃんと一緒に帰国したのを機会に、私の家に同期の者たちが集まって、若夫婦とあかちゃんの歓迎会をひらいたのだが、その時、私は自分の迂闊^{うかつ}さに気づかされることがあって、少々うろたえた。

料理をとりわけようと、「どうぞ」と湯通ししてから冷やした豚肉をサラダに混ぜたものを彼女のお皿の上に渡そうとした時だった。「それはいいです」というので、「嫌いな」と聞くと、「いや。イスラム教徒だから」と彼女は答えた。

「あつ、そうか」と小さく叫んでしまったのは、私である。

それは迂闊にもまったく予想していないことだった。

イスラム教の聖典である『コーラン』に、豚肉を食べることを禁ずる言葉があることを知らなかったわけではない。インドネシアにイスラム教が勢力をもっていることを知らなかったわけでもない。ただ、もっと単純に、日本人である彼女がインドネシア人と結婚したことで、「イスラム教徒」となったことにまったく考えがおよばなかったのだ。「日本人」であることと「イスラム教徒」とを結びつける回路がまったく私のなかになかったのだ。

私の頭のなかに「日本人」としての食事習慣のことはあっても、「イスラム教徒である日本人」の食事のことはなかった。当然考えられていなければならない「食事」のタブーが、きれいさっぱり思考回路から抜けおちていた。

そこには、「日本人」は変わることなく「日本人」であるという固定観念があった。そうした固定観念とは縁がないと

思っていたのは、私自身への買いかぶりであった。彼女は「日本人」であつても、同時に「インドネシア人」であり、異なるタブーの文化のなかに生きる者であつた。自分がどの世界に属しているのかという「アイデンティティー」の根柢は、つねに変化しているのだし、移動しているのだ。そのことに気がつかなかった私は、食卓の上で、イスラムのタブーを冒し、その文化への無知をさらけ出したことになる。

このことは、人間が複数のアイデンティティーをもち、複数の故郷をもつことを教えてくれた。そのどちらかに自分の生きる場所や帰属する場所を単一化するのではなく、二つの場所を移動し、しかも、彼女は、今はイスラムのタブーに従っているのである。自分がなにを基盤にして生きるかは、本来的なものとして決定されているのではない。彼女の人生のなかで選択され、むしろそこで選択された文化のタブーの方が、より優先する場合がある。

^a 翻って日本のことを考えてみると、歴史の上では、つい最近まで食物のタブーが存在していた。私たちはそのことを忘れていて、異なる文化のタブーにうっかり驚きを感じてしまうのだ。

食物タブーのもっともはつきりした例として、牛肉の場合を考えてみればいい。日本の食物史が教えてくれるように、日本の古代を見れば、獣肉を食べることはけつしてタブーではなかった。しかし仏教の渡来と農耕用の牛馬としての需要が、牛の食用をタブーとしたのである。その長いタブーの歴史を変えたのは、明治維新であつた。「文明開化」の象徴として、牛の食用化が積極的に推進された。その際、仏教のタブーである牛の食用を推進することが、「^{ほし}廃仏毀釈」という明治政府の宗教政策と一体となっていたことは、ここでの問題を理解する上で都合がいい。

一八七三（明治六）年に刊行された加藤祐一著『文明開化』のなかに次のような文章がある。

元来獣肉魚肉すべて肉類を忌むは、仏法から移つたことで、わが神の道にはそのようなことはない。その証拠は神代の巻にも、山さち海さちということがあつて、山さちとは山で獣をとること、海さちとは海で魚をとること、山で獣をとつて何にするものぞ。すなわち皮をはいで衣服にもし、肉を切て食用にもするのじゃ。そのほかに神に獣の頭

や魚の肉を捧ぐることは常のこと、獣肉を喰うてけがれるというようなことは決してないことじゃ。

神道と天皇による「近代」的宗教が、仏教のタブーを破って、肉食文化へと向かっていくことがこんなにあきらかな言葉はない。かりにここで「近代」的宗教といってみたのは、明治天皇が肉食を奨励するために自ら肉料理を作らせて召し上がったという事実があるだけではなく、肉食が日本人の健康と体力向上のために奨励されるべきであるという「富国強兵」政策とも結びついていたからである。それは「牛乳」の場合と同じである。

しかし、日本人にとって、肉食の受容は、² けっして宗教上の転向をとおしてなされたのではないだろう。近い歴史のうちでも、猪は「山鯨」と称して食べていたのだし、鹿肉や猿も食べていたのだ。むしろ、牛がタブー視されながら、他の獣肉は食べていたことのなかに、日本のなかに農耕的なタブーとは異なる食の文化が存在して、二つの文化が混在していたことが示されている。³

このことは、篤実でしかも激越であった民俗学者の坪井洋文氏が、柳田国男を激しく批判して、稲作文化とは異なる焼畑文化が日本に存在してきたことを説明する時にいったことであるが、食のタブーが存在するということは、そのタブーをとおして対立する二つの文化が存在することを意味していて、そもそも複数の文化がなければタブーは生まれないからである。

肉食をタブーにすることで、肉食の文化は排除される。そこに支配的文化の移動がおこっているのは事実だが、そこには肉食をタブーとする文化と、排除されたとはいえず、肉食をタブーとしない文化が存在するのだ。

今この問題に深入りするほどの準備はない。私がここで食のタブーのことに触れたいのは、日本人のうちにあきらかに食のタブーが存在したにもかかわらず、⁴ 今そのタブーから離れたことで、タブーというもののへの無関心と不感症におちいついて、それが私たちのタブーをもつ文化への態度にも影響をおよぼしているからである。

さきほど、神道と天皇の「近代」的宗教が、仏教による肉食のタブーを否定したときの言い方を引用して、そこに「文

明開化」の思想があったことを述べた。それを具体的に例示するものとして、よく引合いに出されるのは、明治五年の「敦賀県令」である。

「敦賀県令」がいつていることは、まさしく健康思想と文明開化の思想とが合体したもので、興味深い。現在でいえば、牛肉のコマーシャルに等しいものである。ただそれが「県令」という布告のかたちで行われ、行政の一つであったことが、たんなる興味を越えたことへと導いてくれる。

「県令」はこういつている。牛肉は「人生の元気を稗補^{ひま}し、血力を強壯にするの養生物に候処」といつて大いに牛肉の効用を述べている。この効用に反して「兎角旧情を固守^{とにかく}」して牛肉を食べず、食べないばかりではなく、まるで穢れがあるかのようにいいふらす者は「開化の妨碍^{ぼうがい}」をなすものである、と厳しく非難している。そしてもしこうした者がいるならば、町役人はその者たちに「説論^b」しなければならぬといっている。

ここでは仏教と神道との宗教的対立はもはやまったく語られていない。「文明開化」への障害として、「旧情」を固守する者のガンコさ^cだけが非難の対象となっている。

これを読めば、タブーをめぐる思考の対立軸があることは、あきらかだろう。図式化すれば、こうなる。



この対立軸のなかで、仏教上の食のタブーは進歩を妨害するものとなる。おそらく、この対立軸は、現在の我々の発想ととても近いものであるといえる。つまり、宗教上のタブーのみならず、あらゆるタブーを、進歩の妨害者として考える立場に近い。

明治維新以降の日本の近代にとって、このタブーをめぐる対立軸が、開化と進歩のイデオロギーの母型である。日本人はけっして仏教を棄てることはなかったが、開化と進歩の新しいイデオロギーのもとで、タブーだけはさっさと棄ててしまった。牛鍋屋は文明開化の象徴となった。

この融通無碍⁶なタブーへの態度は、そもそも日本人の食習慣のなかに厳しいタブーが存在しなかったからともいえるし、食の文化がけっして単一のものではなかったからであるともいえる。そう考えれば、厳しい戒律から自由な日本人の心のあり方がそこにあるともいえるのだが、タブーを進歩の妨害者であるとしたことは、タブーのもとに存在する文化に対して、「古い」「A」「B」というレッテルを貼ることになる。

日本が伝統と歴史を捨て去って進歩と健康の思想にかぶれるのは、保守主義者が考えるように、第二次世界大戦後のアメリカ的教育によるのではなく、明治維新によって登場した「近代」的宗教によるのだ。そして、なによりもっとも大きなタブーの破壊は、政治体制の内側には入らないという「天皇」のタブーを明治憲法がやぶって、憲法の条文の内に「天皇」を位置づけ、「天皇」の危機と政治への軍部の介入を準備したことなのだが、それはここでの主題ではない。

しかし、タブーを破壊することは、人間の自由にとって必要なものではないか、という声は聞こえる。確かに、そこでタブーがなくなっていなければ、私たちの食生活は貧しいものとなったままであつたろうし、反対に、「グルメ」などというさもしい言葉も知らずにすんだことだろう。そのことに間違いはないが、明治政府の政策として推進された、牛肉のタブーの破壊は、けっして人間の自由に結びつく仕方で行われたのではない。「廃仏毀釈」のスローガンと一体であつたということに、そもそも信教の自由の否定が背景にあることはあきらかである。それよりも、あきらかであるのは、食のタブーの否定が、先ほど示した保守的「旧情」か進歩的「文明」かという二つの項からなる対立軸のなかで語られたために、食の選択が、一方を棄て他方を取るという、社会的価値の「説論」としてなされたことである。

健康こそが第一の価値となり、そこでは、食べない文化は低い段階にあるとして、拒否された。モノを食べることが、政府の政策の対象となり、天皇も召し上がったという事実が、政策を支えている。政府のジアイによる生活の指導がそこ

にはある。

〈因習〉／〈進歩〉、〈不健康〉／〈健康〉、〈非文明〉／〈文明〉、この分極線をこえることに、日本の近代はそのエネルギーを燃焼して、今もその延長上にいるといつていい。

つまりタブーは破壊されたのではなく、異なるタブーへと転換されたにすぎない。社会全体が一つの共同体となつて価値の選択を行い、行政を先頭にたてて政策として実行される時、新たなタブーが生まれることになる。この食のタブーをめぐる近代の対立軸のなかでいえば、仏教的なタブーが破棄されるかわりに、そのタブーの破壊者としての〈神道〉と〈天皇〉の新しいタブーが生まれたのだ。

獣肉を食べることが、一方の宗教による他方の宗教の否定として行われ、それが文明の優劣として位置づけられるならば、異質な文化との共存という思考が、社会のうちに生まれてくる基盤はない。

私たちは、おそらくタブーからの自由を、文化の成熟の高さと考え、その融通無碍な宗教への態度に立つて、心置きなく豚肉を食べる。私の場合でいえば、「イスラム教徒の日本人」への礼節を忘れることになった。そして、私にはただ軽いショックにすぎないものであったとしても、そうした「イスラム教徒の日本人」の出現と豚肉の拒否を、むしろ野蛮な因習と考え、或いは、C、という諺への違反と考え、ヘンキョウ^eで不寛容な態度と思う者もおそらくいるのではないだろうか。それは、クリスマスも正月も、イースターさえも祝ってしまう日本人の、あまりにも無原則な宗教への態度の延長である。

しかし、そうした日本人のほとんど無宗教に等しい感覚を、この「イスラム教徒の日本人」に強いたとするならば、これほど不寛容な態度というものはないのだ。安んじて無宗教であることが、無差別な宗教儀礼を行わせ、それが日本人の寛容さと思うならば、その背後で、私たちは、「イスラム教徒の日本人」に代表される者たちに対して、無宗教の態度を強制し、それを日本の文化であるとして押しつけているのかもしれないのだ。

(土屋恵一郎『正義論／自由論』による)

注1 廃仏毀釈^{はいぶつきしゃく}……明治元年に明治政府によってされた神仏分離令をきっかけに、各地で起こった寺院や仏像を破

壊する運動。

問一

――線部 a ～ e の漢字は読みをひらがなで、カタカナは漢字に直して楷書で書きなさい。解答番号は a 1・

b 2・c 3・d 4・e 5。

問二

――線部 1「私自身への買いかぶりであった」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次の

① ～ ④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 6。

① 私自身の自尊心を傷つけるものであった。

② 私自身を過度に高く評価していた。

③ 私自身の想像力を超えたことであった。

④ 私自身の能力のなさが露呈したことであった。

問三

——線部2「肉食の受容は、けっして宗教上の転向をとおしてなされたのではない」とあるが、どういうことか。筆者の考え方の説明として適切でないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 7。

① 明治政府の政策により支配的文化の移動が起こったが、にもかかわらず肉食をタブーとする文化と肉食をタブーとしない文化は双方とも存在していたこと。

② 牛肉のタブーの否定が、保守的か文明的かという二つの項からなる対立軸の中で語られ、食の選択が社会的価値の説論としてなされたこと。

③ 「敦賀県令」では、仏教と神道との宗教的対立が大いに語られ、健康思想にもとづいて牛肉の効用を認める神道の方が優位に立つことが説かれていること。

④ 日本人はけっして仏教を棄てることはなかったが、明治政府の政策のもとで、牛肉のタブーだけはさつさと棄ててしまったこと。

問四

——線部3「農耕的なタブー」とあるが、歴史的観点からして、筆者はこのタブーと最も密接に関係のあるタブーは何だと考えているか。次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 8。

① イスラムのタブー

② 天皇のタブー

③ 仏教のタブー

④ 神道のタブー

問五 — 線部4「私たちのタブーをもつ文化への態度にも影響をおよぼしている」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 9。

① 日本のなかにも肉食のタブーがあった事実を忘れてしまい、日本にはもともとタブーなどなかったかのような態度をとってしまうこと。

② 食文化に宗教的タブーが関係することを特殊なことだと考えて、肉食を奨励する文化が政府の宗教政策と一体となっていた経緯を無視する姿勢をとってしまうこと。

③ タブーは対立する二つの文化が存在することではじめて存在するものであるにもかかわらず、その事実を軽く見てしまう態度をとってしまうこと。

④ タブーからの自由を当たり前だとするあまり、タブーのある文化を異質で低い段階の文化であると見なすような姿勢をとってしまうこと。

問六 — 線部5「宗教上のタブーのみならず、あらゆるタブーを、進歩の妨害者として考える立場」を筆者はどのように考えているか。それを端的に表す漢字を本文中から四字以内で抜き出さない。解答番号は 10。

に考えているか。それを端的に表す漢字を本文中から四字以内で抜き出さない。解答番号は 10。

問七 — 線部6「融通無碍なタブーへの態度」とあるが、どういうことか。説明として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 11。

① 禁止された事柄に対して、特定の立場や考え方にとらわれず、その場にに応じて自由自在に対応する態度。

② 禁止された事柄のなかで、新しい考え方や立場を常に肯定する一方で、古い考え方を排撃する態度。

③ 禁止された事柄のなかにある思想の核心を探るために、その場にに応じて適当に済まさない態度。

④ 禁止された事柄のなかから都合の良いものだけを取り入れるために、価値の取捨選択をする態度。

問八

空欄

A

・

B

に入る最も適切な語の組み合わせを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

12。

- | | | | |
|---|--------|---|--------|
| ① | A 神話的 | — | B 不道德的 |
| ② | A 排他的 | — | B 利己的 |
| ③ | A 非科学的 | — | B 反進歩的 |
| ④ | A 保守的 | — | B 偽善的 |

問九

——線部7『グルメ』などというさもしい言葉も知らずにすんだことだろう」とあるが、筆者はなぜそのように

考えているのか。理由として最も適切なものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

13。

- ① 贅沢な食べ物や美味しい食べ物を楽しむ文化は、明治政府が政策として推進した、健康のためになら何を食べてもよいという価値の押し付けによって可能になったことに過ぎないから。
- ② 健康のためになら何でも食べられる方がよいという価値観は、開化と進歩のイデオロギーの行き過ぎとしての飽食を招いたため、むしろ獣肉を食べることを禁止したままの方が適切だったから。
- ③ 贅沢な食べ物や美味しい食べ物を楽しむ余裕は、食べてはいけないものを定める宗教を棄てて、何を食べてもよいという自由の実現の結果可能になったことだから。
- ④ 健康のためになら何を食べてもよいという価値観は、日本のなかに厳しいタブーがなかったことから必然的に導出される考えであるため、それを「グルメ」とわざわざ外来語で呼ぶ必要性はないから。

問十 空欄

C

に入る最も適切な諺を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 14。

- ① 朱に交われば赤くなる
- ② 親しき仲にも礼儀あり
- ③ 魚心あれば水心
- ④ 郷に入れば郷に従え

問十一 本文の内容と合致していないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 15。

- ① 食習慣として肉食をタブー視するか否かは、自分がどのようなアイデンティティーをもち、また何を基盤にして生きているかによって異なるが、そのようなアイデンティティーの根拠はつねに変化しているため、複数のアイデンティティーのなかから本人が選択する場合もある。
 - ② 日本人は、神道や仏教以外の宗教的な行事でさえも祝う無宗教に等しい態度をとるが、これは食のタブーをめぐって対立する文化のどちらも許容してきた歴史に根ざすため、日本にはイスラム教徒の日本人であろうとも順応させられるだけの文化的な成熟さがある。
 - ③ 旧情を固守して肉食をタブー視する者の考え方と、肉食をする者こそが進歩的だという考え方は、互いに対立する考えであるが、この対立軸は第二次世界大戦後のアメリカ的教育に端を発するものではなく、明治維新以降のイデオロギーにもとづくものである。
 - ④ 日本人は、牛肉を食すことをタブーとしながらも他の獣肉は食べてきたが、明治政府が健康と体力向上のための政策として牛の食肉のタブーを否定したため、あたかもタブーからの自由が文化の成熟さを意味するかのよう
- に考え、いまでは気兼ねなく肉食するようになった。

第二問

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

研究室の卒業生でボランティアに熱心な青年がいます。彼の話を知っていると、その場に行って困っている人を見ると助けざるをえない気持ちになるそうです。彼に限らず、人間は **A** を助ける気持ちが強くあります。目の前で、お年寄りや小さい子供が道でつまずいたりすると、おもわず「危ない」と助ける行為はほとんどの人に見られるのではないのでしょうか。特に自分にメリットが還ってくるのを期待するわけでもなく、とっさに取る行為といえるでしょう。このような行為は利他的行動といわれます。このような利他的行動は生物が誕生し進化するなかで、どのようにして生じたのでしょうか。そして、利他的行動は自己のためではなく、本当に他の個体のために行っている行為なのでしょうか。

① 利他的行動のほうが、利己的行動よりも集団としてのメリットが大きいという説があります。災害が起こったときに人々が利己的に我先に逃げ出すのではなく、利他的に助け合う行動のほうが多く助かることが分かっているからです。逃げ道を見つけたときに、ひとりだけ逃げるのではなく、逃げ道があることを皆に知らせる逃げ方が助かる人間が多く、集団としてのメリットが大きい。また、逃げる途中、さらなる困難にぶつかったときに、今度は別の人間が逃げ道を見つけたらするので、助かる確率が高くなります。結局、こうした助け合いが集団を利することになります。

② 集団内での助け合いは動物にも見られます。シジュウカラガンやミーアキャットのように、鳥類や哺乳類の世界では自分が属する集団を守るために見張り役を行う個体が存在します。この個体は外敵が近くにきたことを察するとけたたましい警告音を出して仲間には危険を知らせます。その個体は目立つ行為をするので外敵の餌食になりやすく、このような行為はその個体自身にとってはデメリットといえるでしょう。それにもかかわらず、こうした利他的行動には集団全体でみると、逃げる準備ができ生存率が高くなるというメリットがあるように思えます。

③ 最初に敵を発見した個体してみれば、黙って飛び立つと群れから離れるリスクが大きいので、危険を少なくするため、警告音を発して他の仲間と同時に飛び立つほうを選ぶのだという考え方です。そのため、警告音を発する行為は、

純粹な利己的行為であり、他個体に対する「操作」¹だという説もあります。

④ 南極のコウテイペンギンはアザラシが天敵で、ペンギンたちは水際でアザラシがいるかどうかを判断してから、海に飛びこみ魚をとります。ただ、最初に飛びこむペンギン（ファーストペンギンと呼ばれる）はアザラシが隠れていた餌食となってしまう。それで皆、最初に飛びこむことを躊躇しますが、飛びこまないことには獲物がとれません。そのような状態で最初に飛びこむファーストペンギンは一見すると、

Cの結果、起こった可能性もあります。というのは、このとき仲間を押してわざと水中に落とし、アザラシがいるかどうかを探る個体がいるようなのです。利他的行動、利己的行動といっても、それは外部から眺めた評価であって、実際は明確に区別するのは難しいということです。

生物はそもそも、生まれつき利己的なのか、それとも利他的なのか。これは難しい問題です。利他的行動のなかで最たるものは母親の子供に対する愛情でしょう。この感情に基づく行動は人間に限らず多くの生物で見られ、親が子供を命懸けで保護する行動を取ることがよく知られています。酔っぱらった人の「千鳥足」という歩き方の比喻で知られるチドリという鳥は、捕食者が近づいてくると地上の巣のなかにいる子供を守るために一見奇妙な行動を取ります。どういう行動かというと、親は敵が来ると巣から離れ、わざと傷ついたふりをするのです。この行動は捕食者の注意を我が身に振り向かせ、子供のいる巣に捕食者の眼がいかないようにすることが目的です。そして、捕食者が巣から離れて間近に迫ってくると、とっさに羽ばたいて逃げるのです。

さらに極端な例ですが、カバキコマチグモというクモは母親が自分の内臓や体を食料として子供に食べさせてしまうことがあります。これらの行為は遺伝子にプログラムされている利他的行動といえます。こうした血縁者間の利他的行動については生物の本質にも関わっています。というのは、進化のなかで生き残ったものは、子孫を後代に残すことができたものだからです。そして子孫を作れなかったものは絶滅してしまいました。魚類のように大量の卵を放出したり、哺乳類のように子供を大事に保護して育てたり、それぞれの戦略は異なりますが、ともかく子孫が繁栄した種が現在まで生き延

びてきたのです。

母親だけでなく、群れのなかの血縁関係にある大人が協力し合って子供を守る行為は、多くの生物で見られます。以前、旅行でアフリカのザンベジ川を訪れたときにファミリーと思われる象の集団を見たことがあります。その集団では大人の象が仔象を中心にして川を渡っていました。集団で子供たちを守っていたのです。象に限らず、グループで生活する哺乳類には子供を守る行動がよく見られます。

² 血縁者間の利他的行動はどうして起こるのでしょうか。これについてはリチャード・ドーキンスの理論が有名です。

ドーキンスによると、進化に重要なのは遺伝子であり、遺伝子を保持する個体自身は「遺伝子の乗り物」なのです。そして遺伝子が意図しているのは自らが増殖することで、個体自身は単なる遺伝子を乗せる道具にすぎないといえます。この考えによると、自分に近い子供や兄弟は自身の遺伝子と共通するものが多く、その共通部分の割合が高いほど自分に近いコピーなので自分自身と同じように大切にします。兄弟は二分の一、甥や姪は四分の一というように遺伝子の類似性は薄れていきますが、遺伝子の類似性（いわゆる血のつながりの濃さ）が高いほど大切にする傾向が見られます。『利己的な遺伝子』というタイトルで発表されたドーキンスの著書は、血縁関係が近い集団の行為を生物学的に説明するものとして大きな反響を引き起こしました。このような血縁選択による相互扶助³は多くの動物で見られる行為です。

しかし、利他的行動は血縁関係だけで説明されるものではありません。イルカや犬は人間を助ける行為をすることが時々報道されますが、イルカや犬は人間とはもちろん血縁関係がありません。では、この行動は社会性のある利他的な動機を反映した行為でしょうか？ 残念ながら、そうともいえません。例として、イルカが溺れているヒトを助ける行動を考えてみましょう。イルカの子供や弱ったイルカは溺れることがあります。それを、イルカは日常的に浮かび上がらせるような行動をとります。イルカには海面近くで溺れている細長い物体を持ち上げる習性があり、これを溺れたヒトに応用していることになります。つまり、助けようと考えて行動したのではなく、遺伝子に組み込まれた行動になります。イルカの行動としては利他的行動といえそうですが、「遺伝子による行動進化」というワンクッションがはいります。

別の事例をあげましょう。サンゴ礁に住むアカスジモエビやホンソメワケベラは、アジやハタの魚の身体についた寄生虫を食べます。アジやハタにとっては、これは利他的行動でありがたいことですが、当のアカスジモエビやホンソメワケベラは、単に食料を得るための利己的行動を行っているだけといえます。

それでは前述したような利他的行動はどのようにして生じたのでしょうか。全てに共通した解答はないかもしれませんが、哺乳類では子孫を残す行動、特に子育てに重要なものとして、利他的行動が生まれた可能性があります。愛らしい赤ちゃんの笑顔はいつまで見ても飽きません。赤ちゃんの笑顔や動作は母親に大きな影響を与えます。幸福感をもたらすだけでなく、体内のホルモンバランスにも影響を与えます。たとえば赤ちゃんに授乳するときに母親の体内ではオキシトシンが分泌されます。

オキシトシンは、一九〇六年に発見されたホルモンです。当初は、分娩時の子宮収縮や乳汁分泌に作用するホルモンとして知られていました。その分子構造を調べると、生体の恒常性を保つための浸透圧を制御するバソプレッシンというホルモンとよく似ていました。このバソプレッシンがオキシトシンに進化し、動物の産卵行動を引き起こす生理作用を持つように至ったようです。

オキシトシンは、授乳を誘起するだけでなく、相手との信頼関係を築き共感を引き起こすホルモンとしても知られています。俗に「幸せホルモン」として呼ばれるゆえんです。共感とは相手の立場を理解し、喜怒哀楽といった感情を共有することです。傷ついた人や災害の際の困っている人を見て、自分が同じ立場だったら、どんなに苦しくて悲しいであろうと察して同じ心情になることです。

共感に基づく行動は哺乳類以外の動物でも見られます。渡り鳥のような鳥類は行動を一つにしてヒシヨウしたりしますが、それには共感が伴うようです。ひな鳥の「刷り込み行動」の仕組みを解明した動物行動学者コンラート・ローレンツは、ガンが群れをなして移動する際、湖に共に舞い降りたり、鳴き声を互いに聞いたりすることで気分を共有すると述べています。人間が集団で歌を歌ったり踊ったりすることで気分を共有して盛り上げると似ていますね。人間と同じよう

に、言葉（鳴き声）で感情を共有しているのかもしれませんが。

ちなみに、ローレンツは著書『ソロモンの指輪』のなかで、旧約聖書に登場するソロモン王は天使ミカエルに授けられた指輪をはめると動物と話ができるようになったという話を紹介しています。そして、ローレンツ自身はこの指輪がなくとも動物と話ができると述べています。実際に、彼はハイロガンの鳴き声を聞いてそれが意味する内容を見事に言い当てることができたといっています。その背景には、鳥の鳴き声がどういう意味を持っているかを調べるための地道な観察の積み重ねがあったといえます。渡り鳥の共感の例も、おそらく、そうした調査から直観したものなのでしょう。

哺乳類の例も紹介しましょう。アメリカやカナダの草原にはプレーリーハタネズミという小動物がいます。この動物は一夫一妻制で、家族の絆がキョウコであることで知られています。しかも、人間と同様に共感を伴う行動を示します。たとえば、捕食者に襲われる危険を感じたとき、動揺して不安に陥った仲間に対し、慰めてストレスや苦悩を取り除く行動を取ります。具体的には、毛づくろい（グルーミング）をしてあげたり、眉毛を吊り上げるなど不安と恐怖を感じる表情をした仲間に対して同様の表情をしたりして共感を示すのです。これらを見ると、人間に限らず動物のあいだでも、互いのコミュニケーションのために共感がいかに大切にされているかが分かります。

プレーリーハタネズミのこのような共感を引き起こすものは何でしょうか。調べてみると、やはり脳の前帯状皮質（注）にあるオキシトシンでした。オキシトシンは、ヒトだけでなく、動物にも共感を起こす効果があったのです。また、オキシトシンの効果を妨げる薬品を投与すると、プレーリーハタネズミは一夫一妻制ではなくなり、共感を示す行動もなくなるということが明らかになりました。このことはオキシトシンがいかに利他的行動にとって重要であるかが分かります。

それでは、対象が自らの子供でない場合はどうでしょうか。養子を実子と分け隔てなく大切に育てるヒトの実例は数多く知られています。養子に限らず、ペットを我が子のように大事に飼う人もいます。このことは、共感を伴う利他的行動が進化のなかで大きく変化していったことを示しています。

ペットに関していうと、すでに一万二千年前にヒトは犬と共同生活をしていたという証拠がイスラエルのアイン・マ

ラッハの遺跡で見つかっています。その遺跡には、犬を抱きかかえたロウバ^cの化石がありました。その他の証拠などからヒトと犬はもっと以前、約三万年前から共に生活していたと推察されています。はるか昔から、犬は人間社会の構成員として扱われてきたのです。そのようななかで、犬はヒトの心を察することができるように進化しました。セラピー犬はその良い例です。泣いているヒトに寄り添う行動をしたりもします。最近の研究では、愛犬と見つめ合ったヒトのなかでオキシトシンが増加することが明らかになっています。

異種の動物どうしても利他的行動は見られます。アメリカのネット動画で、農場で飼われているニワトリがオオワシに狙われた動画を見たことがあります。放し飼いのニワトリが餌を探してうろついていると、いきなりオオワシが急降下して飛び掛かってきたのです。しばらくのあいだ、ニワトリは羽根を散らしながら必死に抵抗していましたが、さすがに疲れてオオワシの餌食にされそうになったそのとき、農場で飼われていたヤギが猛ダッシュでオオワシに向かっていったのです。驚いたオオワシはニワトリを放し逃げていました。

このように、異種間の動物のあいだでも、利他的行動と思しき助け合う行為があります。血縁関係がなくとも、農場で一緒に飼われているあいだに、いつしか仲間意識が生じたのでしょうか。動物でも、仲間と認めたものに対しては家族同様に大切にするといわれます。犬猿の仲といわれる犬と猫でも、小さいころから一緒に飼われると仲良く遊びますね。利他性^dのカクトクにも共生と同様に様々なケースや段階があるようです。

利他性に関わるオキシトシンは、授乳だけでなく、子供やほかの動物の世話することによっても分泌されます。「育てる行為」は面倒を見る側にも幸福感をもたらすのです。さらに、見ず知らずの相手に対する親切行為でもオキシトシンが分泌されることが分かってきました。親切行為によってオキシトシンが分泌され、ストレスや鬱・不安を克服することができます。間接的な親切行為である寄付行為にも同様な効果があるようです。

親切な行為は、それを見たり、されたりすることによって他の人にも伝染します。親切をしたり、されたりすることは気持ちのよいことだからです。言い換えると、親切な行為は共感を呼び、共感によって良い人間関係が築かれるので、仲

間意識が高まり強い絆が生じます。そうすると社会が強くなります。オキシトシンのほかにも、「快感ホルモン」として知られるドーパミンもまた、利他性に寄与しているという話もあります。

人類の進化を見ると、ネアンデルタール人はユウカン^eであったにもかかわらず、我々の祖先であるホモ・サピエンスに進化の途上で負けてしまい、最後には絶滅してしまったとされています。現人類は個々ではネアンデルタール人よりも強くはなかったようですが、仲間意識が強く、団結して狩りをしたり、子育てをしていたようです。その結果、より多数の構成メンバーを持つ集団を作ることができ、最終的に生存競争に勝ってきました。⁵種の保存という観点において、利他的行為には大きな意味があるのです。

(鈴木正彦・末光隆志『利他』の生物学』による)

注1 前帯状皮質……大脳半球内側面の前方部に存在する帯状溝周辺および帯状回の領域。

問一

——線部 a ~ e のカタカナを漢字に直して楷書で書きなさい。解答番号は a

16

・ b

17

・ c

18

・ d

19

・

e

20。

問二

空欄 A

に入る最も適切な語を次の① ~ ④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

21。

①

同門

②

同好

③

同輩

④

同胞

問三 次の文は本文中のどこに入るのが最も適切か。本文中の①～④の記号で答えなさい。解答番号は 22。

しかし、これには別の見方もあります。

問四 —線部1「操作」とあるが、筆者はどのようにしてこのような表現をしていると考えられるか。筆者の意図を表す説明

として適切でないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 23。

① 警告音を発する個体が黙って飛び立つと群れから離れるリスクが大きいので、危険を少なくするため、あえて警告音を発して他の仲間と同時に飛び立つほうを選ぶ。つまり、自分の生存確率を高めるために他個体の行動を意図的にコントロールしていることを「操作」という言葉で表している。

② 警告音を発する行為は、表面上は仲間を助ける行動に見える。しかし、実際は自分の利益のために他個体を利用している可能性があり、利他的行動に見せかけた利己的戦略であるため「操作」という言葉で表している。

③ ファーストペンギンを例にすると、仲間を押してわざと水中に落とし、アザラシがいるかどうかを探る個体がいる。コウテイペンギンもシジュウカラガンの例も、他個体を自分の安全確保のための道具としているため、「操作」という言葉で表している。

④ ファーストペンギンを例にすると、最初に飛び込む行動は利他的に見える。警告音もこれと同様であり、他個体への純粋な親切心や自己中心性、そして利他性と利己性の境界の曖昧さを「操作」という言葉で表している。

問五

空欄

B

・空欄

C

に入る最も適切な語句を、本文中から五字以内でそれぞれ抜き出さない。解

答番号は

24。

問六

――線部2「血縁者間の利他的行動」の具体例として適切でないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。

解答番号は

25。

- ① 大人の象が仔象を中心にして川を渡るように、群れのなかで協力し合って子供を守る行為。
- ② カバキコマチグモの母親が、自分の内臓や体を食料として子供に食べさせてしまう行為。
- ③ 捕食者が近づいてくると巣から離れてわざと傷ついたふりをし、子供から遠ざけようとするチドリ行為。
- ④ 子孫を後代に残すという生存戦略のために、魚類が捕食されるリスクを見込んで大量の卵を放出する行為。

問七

――線部3「相互扶助」と異なる意味の語を、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は

26。

- ① 相互依存
- ② 互助共済
- ③ 互酬性
- ④ 互惠性

問八 — 線部4「共感」について、筆者はどのように捉えているか。筆者の考えとして最も適切なものを、次の①、

④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 27。

① 共感は、他者の喜怒哀楽の感情のうち哀れみを理解するためのものであり、オキシトシンというホルモンによって引き起こされる生物学的・生理学的な反応と考えられる。

② 共感は、相手の立場を理解し感情を共有する能力であり、血縁関係のみで強く働く利他的行動を引き起こす重要なメカニズムと考えられる。

③ 共感は、相手の立場を察して同じ心情を共有することであり、共感による仲間意識の形成は種が生き残るために重要な役割をもつと考えられる。

④ 共感は、子育てや集団生活に有利な特性として個体において発達し、種の生存と繁栄に寄与する適応的な個体能力として備わったものと考えられる。

問九 ―線部5「種の保存」に関する説明として、適切でないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 28。

- ① 進化の過程で生き残った種は子孫を後代に残すことができたものであり、子孫を作れなかった種は絶滅したという原理に基づいている。
- ② ネアンデルタール人ではなくホモ・サピエンスが生存することとなった例は、種の保存において個別の能力よりも集団での団結の方がより重要であることを示している。
- ③ 血縁選択による助け合いも、オキシトシンによる血縁を超えた利他性も、種の保存につながっている。
- ④ 種の保存における利他的行動の意味は、個体の生存よりも遺伝子の継承を優先する生物学的プログラムの結果である。

問十 本文の論の展開に合致するものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29。

- ① まず利他性はどうして生じたかを述べ、子育てが利他的行動の原点であることを主張し、共感を引き起こすオキシトシンの説明がなされ、親切行為は伝染するということが述べられている。
- ② まず利他性は遺伝的に決定されていることを述べ、血縁関係が利他的行動の基盤であることを主張し、オキシトシンは授乳時に機能することと、親切行為は個人の範囲に留まることが述べられている。
- ③ まず利他性は血縁関係以外にも存在することを述べ、母親の子供に対する愛情が利他的行動のなかで最たるものであり、ドーパミンもまた利他性に寄与していることが述べられている。
- ④ まず利他的行動の利点について述べ、血縁者間に限らず利他的行動が見られることに言及し、利他的行動はどのように生じたかの説明がなされ、共感に基づく集団の団結が種の保存に大きな意味をもつと主張している。

問十一 本文の内容と合致していないものを、次の①～④のうちから一つ選びなさい。解答番号は 30。

① 利他的行動は一見すると他者のための行為に見えるが、実際には遺伝子や個体の生存戦略に基づく行動である可能性がある。その背景にはオキシトシンなどのホルモンによる生物学的メカニズムが存在し、進化の過程で種の保存に有利な特性として発達してきたものと考えられる。

② 生物の利他的行動は、血縁選択による遺伝子の保存から始まり、共感やオキシトシンの作用により血縁関係を越えた範囲にまで及ぶ。利他的行動はより大きな集団を作ることができ、最終的に生存競争に勝てるよう機能している。

③ 表面上は他者を助ける利他的行動も、詳しく観察すると異なる側面が見えてくる。警告音を発する鳥やファーストペンギンの例のように、実は自己のための巧妙な戦略である場合も見られ、利他性と利己性を明確に区別することは極めて困難である。

④ 利他的行動は、親切行為の連鎖によって、社会全体を強化していく仕組みからなるものである。社会の結束を強化し、集団の存続能力を向上させることは個体レベルにおいて利益があり、同種内での生存競争における決定的な優位性をもたらすための意図的な生存戦略として発達してきた。